

四旬節第二主日 B年

2015. 3. 1

創世記 22・1～18

ロマ 8・31～34

マルコ 9・2～10

クラレチアン宣教会 長崎 壮助祭

今日、わたしたちは四旬節第二主日を迎えています。先週はミサの中で洗礼志願式が行われ、復活祭に洗礼を受ける志願者の人たちにとっては希望に満ちた期間であるかと思えます。すでに洗礼を受けているわたしたちにとって、四旬節というと先ず、悔い改めや節制といった言葉が頭に浮かぶのではないのでしょうか。先週のミサでも「神の国は近づいた、回心して福音を信じなさい」という身が引き締まるようなみことばが読まれたことを覚えていらっしゃる方も多いと思います。

さて、今日の典礼の中で読まれた福音はイエスが栄光の姿に変わる「主の変容」として知られる場面です。イエスの光り輝く姿は、イエスが受難を通して受けることになる栄光の姿です。それを弟子たちに一瞬、垣間見させ、イエスとともに十字架を担い、永遠の栄光を目指して歩むように招くのが「主の変容」の出来事の意味です。

そこで今日は、この福音のメッセージの中に四旬節の過ごし方について何かヒントとなることがないかを皆さんとともに考えてみたいと思います。

わたしが今日の朗読の中で目がひきつけられたのは、ペトロの「先生、わたしは仮小屋を立てましょう・・・」という言葉と、「これはわたしの愛する子、これに聞け」という天の御父のみことばでした。イエスが栄光に輝く姿を見たペトロですが、実はこれに先立つ箇所でイエスの受難と死を受け入れることが出来ずにイエスに叱られました。そのようなことがあった後なので「仮小屋を建てましょう」というペトロの言葉には共感を覚えますが、それに対するイエスの応えはなく、ただ天から「これは私の愛する子、これに聞け」という父なる神のことばが響きます。「私の愛する子」という父である神の声は、イエスが公生活のはじめにヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けたときにも聞こえました。愛する子であるイエスを与えられた神、それもわたしたちとの和解のために十字架の死にまで御子を渡された神の愛は、アブラハムがイサクを捧げようとした時、その信仰を見てそれを止められたことと対照的であり、わたしたちに対する愛のあかしでもあります。この愛に応えるために、神がわたしたち

に望む姿勢が「イエスに聞きなさい」ということなのでしょう。四旬節第二主日にこの聖書箇所が読まれる理由は、ペトロのように「神様に対してに何ができるか」ということよりも、神のみことばに普段以上に素直な心をもって耳を傾ける期間であることを教えてくれるのではないのでしょうか。

冒頭でも触れましたように、確かに四旬節は悔い改め、清めの期間であり、それを節制という形で表すことが勧められます。悔い改めというと日本では、反省の意味に捉えられることが多いのですが、それでは結局自分の嫌な面、ダメなところを見て気を落とすことになりかねません。また、悔い改めは、心を回すという字を書いて回心と言われますが、こちらの方がわたしたちのとるべき姿勢をよく表しているのではないかと思います。

わたしたちを愛し、呼びかけ続ける神様に向き合い心を開いていくことこそが、本当の回心と言えるでしょう。

なぜ、わたしがこのようなことをお話ししたかったかと言いますと、「心を回す、回心するとはこういうことなのかな」と思える小さな体験を最近したからです。三週間前の説教の中で、わたしは今年の初めから一ヶ月間、神学院に泊り込んでの助祭実習をしてきたことを皆さんにお伝えしましたが、そのときの課題となっていたことが三つありました。先ず何よりも心を込めて祭壇上で神様にお仕えすること、そして説教と祭壇奉仕の作法・マナーでした。

恥ずかしい話ですが、何をやっても飲み込みが悪いため、はじめのうちは指導司祭に怒られないようにと具体的な作法にばかり気を使っていました。しかし、一日の大部分を黙想と祈りで過ごす生活が二週間ほどたったとき、徐々に毎朝のミサで祭壇で司祭の横に立つたびに、心が祭壇上で司祭の口から発せられる言葉、あるいは動作に心が引きこまれるようになっていきました。心が自分の足りない部分を見つめることから神様の方へと向かい、実習の終わり頃には自然と神様に身を委ねることができるようになったような気がします。

また、無言の内にも厳しく指導して下さったその司祭が自らの信仰生活を通してわたしに伝えようとした主イエス・キリストの姿、またイエスと人々に仕える者としての司祭の姿が伝わってきたような気がしました。

最後になりますが、第二朗読のパウロの言葉は、わたしたちが人生の十字架の道を歩む時でも、父親が子供の味方であるように神がわたしたちの味方であることを確信して欲しいと、わたしたちを励ましてくれます。このパウロと同じ信頼をもって神様のみことば、イエスが語られるひと言ひと言に耳を澄ませてこの四旬節の時を歩んでいきたいと思えます。